

## 哲学カフェにおける対話と哲学性

武田朋士

岡山県の中国喫茶優遊において、2005年7月17日にテーマ「誰とでも対話はできるか？」で、2006年1月22日にテーマ「価値観の共有は如何にして可能か？」で、私がファシリテータとなって哲学カフェを行った。いずれも、広域文化形態論講座のテーマ「コミュニケーションと現代社会」に沿う活動ということで、ご支援を頂いた。そうした関係から、哲学カフェに関する原稿を寄せることになった。

本来であれば、その哲学カフェの様子を報告することが筋であるのかもしれない。しかし、哲学カフェで話し合われたことをここに掲載しても、恐らくほとんどの人にとって有益なものにはならないように思う。そもそも、哲学カフェは、その話された内容よりも、そこに参加する、居合わせることに、意味がある。

そこで、ここでは、実際に岡山で行った哲学カフェの報告を行うのではなく、哲学カフェという場で行われている対話とはどのようなものか、そして、それは如何なる意味で「哲学」という名称を冠しているのか、ということについて、私の考えを述べたいと思う。それをもって、哲学カフェは参加する、居合わせることにこそ意味があるということについても、理解してもらえらると思う。また、「コミュニケーションと現代社会」というテーマに照らしても、妥当な内容になるだろう。

### 哲学カフェは、～ではない

一口に哲学カフェといっても、様々な形態がある。通常の、喫茶店に集まってテーマをもとに話す（岡山で行ったのは、この形である）、というものだけでなく、映画、書物、絵画を題材にして行うこともある。また、他のイベントに組み込まれることもある。しかしそのいずれも、テーマについて参加者で対話する、ということをもって、哲学カフェとされていることに変わりはない。基本的には、哲学カフェは、これ以上でもこれ以下でもない。

とはいえ、それは、友達同士でのカフェでのおしゃべりとは違う。ファシリテータと呼ばれる、進行役がいる。ファシリテータは、いわば対話の交通整理を行う。したがって、テーマから脱線しても気の向くままに話し続ける、というようなことはできない。

ファシリテータの役割は、参加者によって話された内容の論点整理や、対話の活性化のための話題提起などが主である。テーマに関する情報、知識などを、参加者に伝えるわけではない。したがって、哲学カフェは、講演ではない。

また、討論、ディベートとも異なる。誰の意見が優れているか、誰の考えが正しいか、

ということを決断する場ではない。参加者が自分の考えを述べるのは、自分の意見の正しさをわかってもらうためではなく、何よりもまず、そもそも自分は何を言いたいのかということを理解してもらうためである。

そしてもちろん、哲学カフェは、会議、交渉の場ではない。したがって、参加者間での合意形成を目指しているわけではない。

一般的に「対話」という語が使われ得る場面を挙げて、哲学カフェはそのいずれでもないということ指摘した。現段階においては、哲学カフェとはどのような場で、そこでどのような対話が行われているかということの最良の説明は、かようにして、「～ではない」という形を採ることであるように思う。哲学カフェに関して積極的に言えることは、すでに書いたように、「テーマについて参加者で対話する」ということでしかなく、その「対話」が、社会的に行われている如何なる種類の対話とも異なるからである。

哲学カフェは、おしゃべりではない。哲学カフェは、講演ではない。哲学カフェは、討論、ディベートではない。哲学カフェは、会議、交渉ではない。そのいずれでもない形で行われる「対話」が、哲学カフェではなされている。

## 哲学カフェの対話は、何も目指さない

哲学カフェでなされている対話は、現在社会的になされているそれとは異なる。しかしそれは、明確に何か目的を持っているが故ではない。むしろ、目的を持たないことでなされる対話のあり方を、哲学カフェは模索している。

目的や相手によって、私たちの対話における話し方や聴き方は大きく規定される。わかりやすいのは、討論、ディベートのそれである。私たちは、「討論」と銘打って、それぞれが自説を一方的に展開するだけという光景を、しばしば目にする。そこでは、自分の話している内容を理解してもらうだけでなく、納得、支持してもらうことが目指されている。わかってもらえなければ、語気が強くなり、相手の話を聞かなくなり、一方的にまくしたてる。そういった話し方、聴き方になっていく。このように、その対話の目的は、対話に対する参加者のあり方、つまり話し方、聴き方を、規定する。

そして、話し方、聴き方は、そこで話される内容に、大きな影響を与えることがある。話をしているとき、私たちは、その話し相手の表情、相槌、しぐさ、場の空気といったものを感じ取って、使う言葉、言い回しを選ぶことがある。それはすべて、相手に言いたいことを伝える、理解してもらうためである。時には、話している内容すらも軌道修正して、とにかく相手に伝わることを重視する場合すらある。逆に、わからないという顔をして聞くことで、相手に、内容の修正を促すことができる。

自分の考えている内容を正しく伝えるということと同じくらいに、あるいはそれ以上に、相手に伝わることをそのことを重視する。これは、対話について考えるうえで重要な点だと、私は考えている。相手に伝わることを重視するのは、当然、あらゆる対話、すなわち先に

あげたおしゃべり、討論、ディベート、講演、会議、交渉などでも言えることである。そのはずである。

しかし、おしゃべりは、相手の機嫌を損ねるようなことがない限り、言葉が選ばれるということはない。ただ思うままに話すだけである。(このとき、話し相手には、分からなくても、テンポよく相槌を打ち、とにかく話を進めさせることが求められる。そして、リズムよく、その役割を交替する。) 討論、ディベートは、何よりも自説が「正しく」伝わることを目指すはずである。内容、論理の厳密さを放棄してまで、相手に伝わることをそのことを重視することはない。内容の厳密さを重視するという意味では、講演も同様である。一方で、会議、交渉では、自分に有利に話を進めるために、時に、十分に相手が理解していないことの方が望ましい場合さえある。

このように、必ずしも、相手に伝わることを重視されるわけではないというのが、現在社会的に行われている対話である。それは、これらの対話が、すでにそれがどのような場であるか(とにかく言いたいことを言ってストレスを発散する、とにかく自説を展開する、とにかく相手を納得させる、など)が明確であるため、話し方、聴き方も固定化してしまっているためである。

哲学カフェは、参加した事のある人なら覚えがあるだろうが、これがどのような場なのかが、参加していてよく分からないということがある。初めて参加する場合は、ほとんどの人がそのように感じるだろう。当然のことである。繰り返すようだが、哲学カフェは、「テーマについて参加者が対話する」、それだけの場でしかない。そして、その対話のあり方は、既存の社会的場面において見出されないものを目指している。このような規定しかなされていなければ、戸惑うのが当然である。どのように話し、どのように聴けばいいのかが、わからないのだ。

哲学カフェは、対話の目的を明確にはもたない。故に、その対話のあり方を規定してくるのが、その時に居合わせた参加者と場所ということになる。かように不安定な条件のもとでは、対話のあり方、話し方、聴き方も、流動的なものにしなければならない。敢えて言えば、その流動性を呼び込むことこそ、哲学カフェの対話の目的と言える。

哲学カフェの対話は、何も目指さないことで、それ自身が目指されている。

### 哲学カフェでの、「話し方」、「聴き方」

哲学カフェでは、一般的に社会でなされている対話での話し方、聴き方ではない、新しい話し方、聴き方が求められる。と言っても、それらは、特別な仕方であるわけではない。すでに述べたように、相手に伝えることを重視する話し方であり、相手の言いたいことを理解しようとする聴き方である。哲学カフェが特殊なのは、このような話し方、聴き方が徹底されることが求められるということである。

じつはこれは、意外に訓練を必要とすることである。話すことも、聴くことも、「相手」

込みの行為である、ということ常意識すること。それはつまり、「本当に相手も自分と同じ意味でその言葉を用いているか」という問いを常に携えることが求められている、ということである。これは、コミュニケーションそのものに対する懐疑であるため、当然、日常的には、そのような問いを抱えることはあまりない。多くの場合、コミュニケーションは、何かを為すための手段であるからである。しかし、哲学カフェでは、コミュニケーションをとること、対話をするのは、手段ではない。それ自身が目的である。

哲学カフェでは、所謂哲学者の名前を出し、その人の考えを引用するということを、控える。最近では私がファシリテータを務める際は、哲学カフェを始める前にそれをわざわざ言うことはしなくなったが、望ましくないことには変わりはない。ひとつには、「かの哲学者がこう言っているから」ということを自身の考えの根拠としてほしくない、ということがある。そして、もうひとつは、ここではこちらの方が重要なのだが、援用された議論に精通していない人のことを排除した話し方になりかねない、ということがある。所謂「哲学的」議論、「哲学的」概念の豊かさは、その背景を知っている人間にとって感じ取られる豊かさであり、そうではない人間にとっては、それらはただ難解さしかもたらさない。したがって、十分な説明ができるのであれば、哲学的概念を出してもかまわない。しかし、まずはその概念の説明からはじめることになってしまう。

もちろん、誰にとっても明確な言葉、概念だけで話せ、というわけではない。むしろ、そのような言葉はないということ前提として話し、聴く必要がある。「哲学」カフェで「哲学的」議論を援用することは、かえってその前提を覆い隠すことになりかねない、というわけである。

岡山の哲学カフェで「誰とでも対話は可能か」をテーマにしたときは、参加者からの要望で、使われている概念の定義、議論の段階を、とても丁寧に参加者みなで確認しながら、対話を進めた。その結果、対話は極めてリニアに進み、その場での結論のようなものを出すことができた。しかし、その哲学カフェの後感じたのが、対話から、「誤解しているかもしれない」という疑いを除くことで、かえって失っているものがあるかもしれない、ということだ。対話における誤解の可能性は、対話そのものを活性化させる。その場で定義が確認された概念は、もう、他の意味内容を持つことが、「定義から外れる」という理由で否定される。その結果、対話の他のあり方が、その可能性という次元ですら、排除されるのである。

「誤解しているかもしれない」という疑いを抱きながら話し、聴く。それは、対話が別様にある可能性を保持するような話し方、聴き方である。おそらく、そのような話し方、聴き方こそ、最も汎用性を持つ。

相手に伝えることを重視する話し方とは、何も、相手が理解してくれることだけを話せ、ということではない。哲学カフェでは、聴き手側にも、相手が何を言いたいのかを丁寧に聞き取ることが求められている。いずれの側も、普段より、あるいは他の対話の場面より、多くの言葉、考え方、概念に対して、疑いを持ってほしいということである。「疑いを持ち

つつ」話す、「疑いを持ちつつ」聴く。そのような話し方、聴き方を、私たちは他のどの場面でも養うことがない。身につけることがない。身につけていない話し方、聴き方で、話し、聴く。哲学カフェが求める話し方、聴き方とは、そのようなものである。どこかで身につけてきた話し方や聴き方では、その日その場所に居合わせた参加者には通用しないかもしれない。新しい話し方、聴き方とは、そういうことである。

## 誰と対話しているのかわからないように、対話する

哲学カフェは、どこにもない場所を目指している。どういう場所かを指し示せない場所を、目指している。それは、そのとき居合わせた参加者、場所によってのみ規定される場所である。かように不安定な場で、参加者が出来ることと言えば、話されている内容を丁寧に聴き、それに対して自分が考えたことを丁寧に伝えることだけである。

私が哲学カフェを行う場合、特に自己紹介ということを行わない。かつては哲学カフェへの導入として行っていたが、今では名前もよく分からないままに始めている。このように皆が匿名であるような場所では（とはいえ、もちろん、見た目で、年、性別などが推測されることは、妨げられない）、それぞれが最大限の「丁寧さ」を発揮する方向で、話し、聴く。誰と向かい合っているのか分からない場面では、誰と向かい合ってもいいような構えが要請される。（「構え」とは、話し方、聴き方の双方を含んだ、対話に対する総体的なあり方、だと考えてもらえばよい。）その要請に如何にして応えるかは、個人差があるだろう。「正しい」構えがあるわけではない。しかし、それぞれの仕方であれ、誰と向かい合ってもいいようにコミュニケーションに対する感度を上げる方向に向かうだろう。

しかし、「誰と向かい合ってもいい」という構えとは、「誰と向かい合っても変わらない」ということではない。例えば、あらかじめ発言内容を用意してきたり、綺麗に意見をノートにまとめたりしてから発言する人の言葉は、それがどれだけ緻密に練られた論理であり、どれだけテーマの本質を突いた意見であっても、他の参加者に届かない、ということがある。その場に居合わせた参加者に対して話をしていると、聴き手が受け取らないからだと思われる。そうすると、なかなか内容が頭に入ってこない。誰に向かい合ってもいいように、という構えは、その日居合わせた参加者に対する構えでなければならない。

このようにして、哲学カフェでの対話はなされる。したがって、実際に問いただされることはないが、それがそもそも対話として成立しているかという自己言及性を孕みながら対話をしているといえるだろう。哲学カフェでは、テーマについて対話しながら、これは対話として成立しているかを問うているわけである。

## 自分自身との対話を生起させる

哲学カフェでの対話には、なによりもまず自分の考えを相手に伝えること、そして、相

手の考えを理解することが求められる。そして、哲学カフェでは、匿名の他者と対話することが多い。そうしたことから、誰と向かい合ってもいいが、他ならぬ今ここに参加している人たちに向かい合うような構えが必要になる。このような構えとは、聴き手の表情、しぐさ、相槌、場の空気などに対する感度を上げて、言葉を選びながら話をすることであり、出来る限り相手の考えの文脈を汲み取って相手の言葉を聴き取る、相手の考えを理解しようとするのである。

言葉を選びながら、相手に伝わるように話すためには、自分が話し手であるとき、同時に、聴き手にもなっているということを、いつも以上に意識する必要がある。どのような場面であれ、話をしている以上、自分の声を同時に聴き取ることになる。その、「聴き取る」意識を、哲学カフェでは高める必要がある。そうしなければ、そもそも私は何が言いたいのか、どういう考えを持っているのかを、知ることができないからである。

私たちは、すでに話す内容をすべて心の中で言語化してから話すということは、実はあまりしない。何かしら話したいことが漠然と感じられ、切り口となる言葉さえ思いつけば、話し出すことができる。考えてから話すというよりも、話しながら考える、話して考える、ということがある。この場合、すでに述べたように、他者の表情、相槌、しぐさ、場の空気などに反応しながら、考えを述べていることになる。自分の考えが、少なからず、自分の考え以外のものを巻き込みながら、話されるのである。

そのようにして話された自分の考えを、私たちは疑うことがあまりない。これは「本当に」私が言いたかったことなのか、と。特にそのような疑いを抱かないのは、恐らく、私たちは、すでに自分の中にあつた「考え」を話した、と思いこんでいるからである。しかし、多くの場合それは誤解である。実際に話されたことこそ自分の考えであり、話される前に「考え」はない。

哲学カフェでは、扱われるテーマはシンプルでありながら、話される内容は込み入っていく。しかし、ほとんどの人が、話す内容を完全に決めてから、言語化してから、話しているわけではないだろう。すでに述べたように、そのような話し方では、逆に伝わらないことの方が多いからであり、カフェという場所柄、熱心にノートをとって考えを組み立てるといふこともあまりされないからである。ということは、込み入った内容でも、私たちは、話しながら考えることができるということである。むしろ、複雑な内容ほど、事前に心の中で考えを組み立てることをしないのではないか。

話が複雑になり、伝わるようにと、できるだけ丁寧に話をしようとするほど、自分の声が自分から離れていくように感じることもある。言葉が、言葉を語りだしているかのように。それでも、他者からの、うなずき、同意の声があれば、それは自分の考えが通じたのだと、私たちは考える。おそらくこのとき、私たち自身も、自分の考えを知るのである。私たちは、他者に向けて自分の考えを話しているまさにその時、自身の考えの生成に立ち会っている。

話されることの全てが、話される前にクリアーになっているわけではない。話しながら、

自分はこういうことを考えていたのか、と知ることさえある。こうして私たちは、他者と対話すると同時に、自分自身との対話を始めていることになる。

## 哲学カフェの哲学性

哲学カフェで求められる構えは、他者に向かうものでありながら、自分自身に向かい合うことを可能にする。他者に伝えることを考えて話すことは、はからずも、自分自身に話しかけることになるのである。そうした行為を、哲学カフェは、「話す」、「聴く」ということに特化した場所であることによって、先鋭化することができる。匿名の人たちが集う哲学カフェでは、「話す」、「聴く」という行為がまずあって、話す主体、聴く主体は、その行為から生起してくる。そして私は、哲学カフェの「哲学性」は、話す主体、聴く主体を生起させる場所であることにあるのだと考えている。

哲学カフェは、所謂「哲学者」の考えを駆使する場ではない。所謂「哲学的」な概念を駆使する場でもない。すでに述べたように、それらは、逆に、避けられる。話されている内容が「哲学的」であるかどうかを判断することは難しい。例えば、不当な価値判断を前提にしていないかなど、基準を考えることはできる。しかし、実際の対話はその基準に適ったものであるかどうかは、当の対話を通して解明していくしかない。結局、対話の内容の「哲学性」が判断できるのは、すでに対話が終わってからなのである。また、「哲学的内容」を求めて対話をするというのは、哲学カフェが対話の先を何も求めないということに反する。「哲学的」でなければ、という思いは、対話のあり方、話し方、聴き方を、それぞれの参加者の「哲学」イメージによって規定してしまうことになる。そういう意味では、哲学カフェは、「哲学的」なことを考える場所ではない。

そうではなく、私は、哲学カフェにおける対話に対する構えにこそ、哲学カフェの「哲学性」を求めるべきだと思う。哲学カフェは、対話の先を求めず、対話することだけを目的とすることによって、「話す」「聴く」という行為を先鋭化することを可能にしている。そして、すでに述べたように、話す、聴くという行為「から」、話す主体、聴く主体が立ち上がる。「私」が話しているのではなく、他者に対して話していることによって、「私」が生起する。こうした「私」のあり方であるからこそ、自分自身との対話ということも可能になる。そして、対話に「自分自身との対話」を組み込んでいることが、哲学カフェの「哲学性」を担保する。なぜなら、それが、哲学の基本的態度である、「内省」につながるからである。

## 哲学カフェが促す内省

内省とは、自分自身を振り返ることである。「私」が、「私の考え」について、「私の経験」について、考えることである。哲学カフェでの対話は、考えられるこの「私の考え」「私の

経験」を、他者を經由して、対象として措定する。もちろん、哲学カフェでなければそれがないというわけではないし、他者との対話を通してしか内省ができないというわけではない。ただ、哲学カフェでの対話を通してなされるということであり、日常生活の他の場所に比べて、それが強く促されるということである。

このような、他者との対話を経由する内省のあり方については、大きく考察の余地があるように思う。これは、哲学的な営みとして積極的に評価してみる価値のあることである。これまでの哲学は、あまりに書物に頼りすぎてきた。

哲学カフェでは、「誰に」向かって話しているかということが、あまり問題にならない。あえて言えば、「場所」に向かって話される。当然、その日の参加者に向かって話されているわけであるが、特定の「誰か」ではない。何度も述べてきたように、哲学カフェでは、他者に伝えることを何よりも意識して話すことが求められる。しかしそれは、二人称の「あなた」に伝えるように、ということではない。そのような親密さ、信頼を前提とし得ない関係において、他者に向けて話すことが求められている。その場合、イメージとしては、「場所」に向けて話すことになる。

こうして「場所」に向けて話された言葉には、他者の言葉が重なっていく。これが、特定の他者に向けられた言葉であれば、なかなかそうはいかない。「重なる」というよりも、ぶつかりあってしまう。言葉が「重なる」ことで、相容れない考えであっても、直ちにどちらかが排除されるということもない。ある人の言葉が、他の人の言葉と呼ぶ。それが繰り返される。そうして、その「場所」に、テーマを巡る考えが渦巻く。やがて、誰かがそれを、明確なわかりやすくまとめてくれることもあるが、それはすでにその人の考えではない。誰の考えでもない。確かに、参加者は、「自分の考え」を話す。それが「自分の考え」だと考えるのは、ほかならぬ自分の口から言葉が発せられたからである。だが、おそらく、考えも言葉も、場所に醸成されている部分が大きい。

他者に対して話しかけ、言葉にして初めて知る自分の考えがある。それは、一般的に思われているような意味での、「本当の」「純粋な」自分の考えではないかもしれない。それでも、錯覚であっても、「自分の考え」を対象化することが重要である。場所と他者の力を借りることで、おそらく自分ひとりでよりも容易に、明確に、そしてまた別様に、「自分の考え」を認識することができる。こうして、私たちは、哲学カフェで内省を促されるのである。

また、哲学カフェでは、自身の経験を振り返って、テーマについて語ってもらうよう促す。すでに述べたように、どこかで仕入れてきた知識、哲学者が述べている論理を拠りどころとして話をすることを避けてもらうためである。抽象的なテーマについて、自身の具体的な経験から考えて、語ってもらう。とはいえ、自分の経験をそのまま話すわけにはいかない。テーマに沿う形で、その経験から考えたことを抽象化させて話す必要がある。当然のことながら、プライバシーも何も考えず経験したことを話せ、というわけにはいかない。

この「抽象化」という作業は、他者に向けて話すことを想定すると、少なからず必要になることである。もちろん、他者に向けて話すことを想定しなくても、抽象化は可能である。しかし、心の中で考える分には、特にそういうことを考えなくてもよい。他者に向けて話す上では、必要であるということである。そうして、しかし、抽象化するからこそ見出せるその経験の特性、あるいは構造などがある。こうして話された、抽象化された自身の経験についても、他者に対して話すと同時に自分自身に向けて話すことで、内省の対象となるのである。かくして哲学カフェは、抽象化された自身の経験についての内省を、私たちに促す。

哲学カフェにおける「対話」とはどのようなものかについて、そして、哲学カフェの「哲学性」はどこに求められるのかについて、私の考えを述べてきた。ここで描き出した哲学カフェ像は、私がこれまで哲学カフェにファシリテータとして、あるいは参加者として参加してきた経験に、大きく負っている。哲学カフェについて共通に認識されていることを説明した、というわけではない。あくまで、私は哲学カフェでこういうことを行ってきたのかもしれない、という雑感を、つたないながらにまとめてみたにすぎない。

哲学カフェは、ただテーマについて対話することに特化した場所である。極めてシンプルな構成であるが、その対話の豊かさは、汲みつくしがたい。そして、その哲学カフェの対話の豊かさは、実際に参加してみて感じてもらうしかない。しかし、その豊かさの「汲みつくしがたさ」について、本稿で少しは明らかにできたように思う。